

## 武者小路實篤自我思想的形成---

### 談其對托爾斯泰的崇拜及出離

夏 艷 文

#### 摘 要

在武者小路的中心思想形成的過程中，托爾斯泰具有極重要且關鍵性的角色。武者小路一生所抱持的中心思想固然和托爾斯泰有相當程度的差異，但是，其對武者小路的中心思想的形成確實有其無可忽視的影響。

因托爾斯泰思想的刺激和啟發，武者小路了解「人的價值」、「人類愛」的真義。武者小路跳脫出對托爾斯泰的崇拜，並完成其自我中心思想之後，仍終身抱持著和托爾斯泰一樣的主張---「追求良心和心靈的成長，人生的真義在於追求精神上的平安和快樂」。武者小路也在托爾斯泰的影響下，發願成為對人類成長有益的人道上的偉人。實際上，武者小路終其一生也一直以心靈改革者、教育者的姿態，在文壇上發光發亮，因此本論文試著以「武者小路實篤的思想形成與托爾斯泰的影響」為題作論述。

關鍵字：托爾斯泰、人的價值、人類愛、心靈的成長

## 武者小路實篤における自我形成——

### トルストイ主義の受容と離脱を中心に——

夏 艷 文

#### 摘 要

周知のように、トルストイは武者小路實篤の中心思想形成に最も大きな役割を果たしていた。しかし、武者小路が一生堅持していた中心思想と主張はトルストイ主義とはかなり違ったところがある。確かにトルストイにより、武者小路は「人間の価値」と「人間愛」を知り、良心に従って生きれば、真の快樂を得られることを知った。トルストイが主張していた「良心と靈性の成長に役立つ精神的平和と快樂を追求することこそ人生の真義である」という信念は武者小路が終身抱いていた信条となった。人類に役立つために人道の偉人になろうとしたのであった。又、武者小路は権勢や英雄崇拜や金持ちの虚偽虚栄と戦争の罪惡を憎むトルストイの考え方に警醒され、深く共感を覚え、従来未熟な野心や権勢欲から脱却したのである。

本論で、筆者は「序言」と「結論」のほかに、「トルストイへの心酔」、「トルストイ主義の作品」、「トルストイ主義からの脱出と超越」、「新しき村におけるトルストイ主義」の四小節にわけて、武者小路の中心思想の形成に肝要な影響を与えた思想家であるトルストイが武者小路にどのように刺激や影響をもたらしたか、そのことが作品にどのように結実したのか、又、武者小路がトルストイ主義の自縄自縛からどのように脱出し、自己の道を歩むようになったのかについて論述したい。

キーワード：トルストイ、人道主義、人間愛、心靈の成長

## 武者小路實篤における自我形成——

### トルストイ主義の受容と離脱を中心に——

#### 一、はじめに、

華族の家庭で育った武者小路の、幼少年時期から受けていた家庭教育と学校教育が忠君愛国と倫理道德の教育であったことは疑う余地のない事実である。日本人の精神思想と倫理観を支配する儒教思想は確かに武者小路に極めて強く、そして深い影響をもたらした。武者小路は儒教の忠孝節義の価値観に共感していて、天皇のために何時でもその身を捧げてよよかったのである。日本の儒教思想の忠孝優先の倫理観と道德観はすでに徹底的に武者小路の血と肉にしみ込んでいたと言っても過言ではないであろう。トルストイアンになる前の彼は、将来大学に入って法律を専攻するか、あるいは政治家になりたいという大望を持っていた。トルストイや聖書に接しなかったら、彼は恐らく実業家になったであろう。そして野心家にならないまでも、政治家になって、手段を問わない人間になったであろう。この時期に彼の心に持っていた価値観は、すべて伝統的な忠君愛国や英雄崇拜に関わるものであった。

だが、周知の通り、日本の文壇で、武者小路が白樺派の中心人物として、人道主義的、個人主義的、理想主義的な主張をし、自己と他人を尊重し、自己の生命を生かすことを提唱していたことは広く知られている。彼は小説、戯曲、詩、雑感、評論、絵画などによって、広範囲に

わたり、彼の人生観を読者に訴え、読者の共鳴を求め、これによって、社会改造の目的を達成することを自己の使命とする人生哲学の実践者であった。それで武者小路の思想を研究する学者の殆どが武者小路がトルストイをはじめ、メーテルリンク、ホイットマン、ロダン、エマソンなどの思想の影響を受けたことを強調している。本稿では武者小路の中心思想の形成に肝要な影響を与えた思想家であるトルストイが武者小路にどのように刺激や影響をもたらしたか、武者小路の中心思想の形成にどのような役割を果たしたか、そして、どのようにトルストイから思想的な独立を果たしていったのかに就いて述べてみようと思う。

#### 二、トルストイ思想への共鳴と心酔

トルストイはキリスト教の人類愛と博愛思想に基づく人道主義と平和非戦を主張し、文学の創作及び農奴の解放と教育に努力を傾けながら、政府の専制腐敗と社会の不正義を厳しく非難し、ロシアの良心と見なされた。晩年、更に悪への無抵抗を説き、無政府主義者になった。ルソーの思想に深く影響を受けたトルストイは、また、自然への回帰を唱え、現代の物質文明への批判を行うと共に、自己に対する厳しい反省を行い、あらゆる贅沢や欲望を否定した。そして、田園生活を賛美し、肉食を廃し、菜食主義者、禁

欲主義者となり、遂には芸術否定に傾いてさえ行ったのであった<sup>1</sup>。

明治期以後、ロシア文学は日本文学に大きな影響を与え続けてきた主流の外国文学であり、トルストイとかツルゲーネフとかがその時代の文学愛好者の心の糧となってきたのである。トルストイの思想は徳富蘆花等の紹介と研究により、平和主義に立脚した戦争の罪悪と惨害を説き、無私の人類愛を唱える人道主義者として受け入れられるようになっていくのである。

武者小路は中学五・六年から『万朝報』を購読し、内村鑑三、幸徳秋水、堺枯川等の文章を読んで、彼等を尊敬した。『万朝報』はしばしばトルストイなど外国の思想化を紹介していたので、高等科に入る前の夏休み、即ちトルストイに接する前に、武者小路はトルストイの事跡について多少は聞いたことがあったのだと思う。

武者小路が初めてトルストイの著作に接したのは高等科に入る前の夏休みに、三浦半島の金田の叔父の家で、叔父の薦めにより、トルストイの著作と聖書を読み始めた時である。両方とも彼をすっかり感心させた。叔父が翻訳されたトルストイの本をほとんど全部持っていたから、彼は喜んで『我が宗教』、『我が懺悔』をはじめ、トルストイの本を読み始めたが、トルストイに深く心酔していったのは一年後であった。この時期に、武者小路は失恋の苦悶体験していたから、トルストイの著作を読んで慰めを求めようとした。『或る男』の中では、「失恋の寂し

さを最も強く慰めてくれたのはトルストイであった。彼はますますトルストイに夢中になって、日本語は勿論、ドイツ語に訳されているものでも手に入るものは片ぱしから読んだ。」「彼の失恋の精神的方面の補いはトルストイによって一番補いを得た。」と記述している<sup>2</sup>。

青少年時代から国家や社会の問題に関心を持ち、他の人のために幸福を創造する願いを持っていた武者小路は、トルストイの人類の幸福を創造するために無私無我に努力している高貴な情操には自然に感心し、敬服した。トルストイはキリスト教に基づいた人道主義・博愛思想を宣揚し、憎悪と暴力を揚棄し、更に戦争に絶対に反対したのである。これらの理念は幼い時からどんなことでも暴力を嫌った武者小路の気質にそっくり符合したものであった。トルストイの思想に接触してから、彼は心に大きなインパクトを受け始めた。青少年特有の正義感と社会改革の熱情が誘発され、偶像崇拜や日本の神社の馬鹿らしさや戦争の残酷などを批判したり、当時の社会のいろいろな不合理な制度をも否定したりするようになった。

トルストイと武者小路は、個性の上で、似ているところがたくさんあると思う。二人の相似点は、共に率直で、恥ずかしがりやで、真理を愛し、強い個性を持っていることである。二人とも一つのことを思いつくと、全身全霊で実行する性格である。更に武者小路はトルストイと同じく、不公平なことには頭を下げない正義感と利かぬ気を持っていたが、暴力は

<sup>1</sup> ロマンロラン 著 傅烈 譯 『托爾斯泰傳』大漢出版社 1982年 p.89,180 を参照

<sup>2</sup> 「或る男」84節 『武者小路實篤全集』(以下『全集』と表示) 第一巻 小学館 1987年 を参照 P.133

嫌いだった。この点については、武者小路の場合は、下の級の乱暴者と非暴力的に対抗した事件、トルストイの場合は、フランス人の家庭教師トン・マソンとの事件<sup>3</sup>によって証左することができると思う。それに、二人とも貴族出身であったが、家庭生活に余り余裕はなかった。武者小路は三才の時父が亡くなったが、トルストイも二才の時に母を失い、十才の時には父も亡くしていた。二人とも健全な父母愛を得ることなかったが、偉い女性（実篤は母とトルストイは姑母）によって育て上げられたのである。青少年期には、トルストイも実篤と同じく、成績が良くなかったし、自分の外貌に自信がなく、片思いの初恋に失敗した。同病相憐れむとは、まさに両者のことを指すようなもので、知友に会うような心理で武者小路はトルストイに対していつの間にか特殊な感情が生じたのかもしれない。トルストイの思想と主張は、このような共通点があったことから、彼が心からの深い共鳴を起こしやすかったのだと思う。

当時、三浦半島の金田で暮らしていた武者小路の叔父勘解由小路資承は、トルストイのように、晴耕雨読の半農半読の生活をしていた。暇な時、宗教や哲学方面の書籍を愛読し、よく友人や武者小路兄弟と宗教哲学方面のことについて討論した。トルストイにも好意を持ち、その思想に心服するようになっていたのである。そのような精神的要素を強く持っていた資承の生活は、トルストイの回心後の農民的生活によく似ていたのである。

したがって、小学校に上がる時からこの叔父と親しくし、その半農半読の生活を羨ましがっていた武者小路がトルストイの自然への回帰の理念に親しみを感じ、喜んで受け入れたのは極めて自然のことであろう。

又、明治27年から28年にかけての日清戦争の勝利による遼東半島を主とする中国に対する割譲要求が三国干渉を引き起こしたことで国民の間には愛国熱が高まった。労資対立の問題が深刻化し、社会と個人の対立も著しくなっていた。思想界も混乱状態を呈し、日本主義と欧化主義、家父長制の伝統と個人主義との対立が深まっていた。

青少年期から、人生についての問題を真剣に考えていた武者小路は明治36年の夏休みに、『我が宗教』と『我が懺悔』を読み初めてトルストイに接触したにもかかわらず、この期間にトルストイの影響を受けた痕跡が、すでに次の二つのことに現れている。

一つは、学校で同級生と忠君愛国について討論した時「愛するものに精神的にも自由を与えないのは愛するということにはならない。」「国民を一人でも多く生かしたいが為に戦争するのぢやないか、皆死んでもいい覚悟が出来れば戦争しないがいい。」<sup>4</sup>と主張して、国民が残らず死んでも戦争するというようなファナティックな愛国論を鋭く批判したことである。もう一つは、輔仁会大会で発表した「粗暴と活発」という演説の中で、彼は活発をほめて粗暴をけなした。粗暴な人は平和を愛することを知らず、それを恥

<sup>3</sup> 林致平 『托爾斯泰生平及其代表作』 五洲出版社 1976年 p. 10, 11 を参照

<sup>4</sup> 「或る男」『全集』 第五巻 p. 126

とするという考えを述べたことである<sup>5</sup>。

この二つの事件にはトルストイの影が見られる。しかも彼が読み始めたのは思想的、宗教的な著作である『我が懺悔』と『我が宗教』で、その内容は人生と生命の意義に関わるものであった。武者小路の反省力はトルストイの著作を読むことで呼び醒まされていったのだ。精神的に目覚めた武者小路は自分の人生や人生の意義や生命の価値などに対して、それまでにも増して、真剣に思考し始めた。だが、この時期、彼は忠君愛国と英雄崇拜の思想からまだ完全には脱却しきれていなかった。

しかしながら、翌年(明治37年1月28日に)、彼は邦語部で「誘惑」と題して講演した。大津山国夫は彼の『武者小路實篤論—新しき村まで—』の中で、「誘惑」中の「本院の行軍及び遊泳が甚だしく少年をして邪道に誘惑せしめる動機だ」という言葉を引用し、トルストイ主義に浸されてゆく精神的位相とその推移を述べている<sup>6</sup>。この言葉から、武者小路は少年に行軍や水泳に強いて参加させることに質疑し、学校の軍事教育を非難した。そして彼の論調と主張は前年より著しく激しくなったことが見られる。

明治37年3月に書いた「所感録」の論調は、明治36年11月の「所感録」(1)の「意思教育を望む」や「人身攻撃について」などと著しく異なり、人生の意義と生命の価値は栄華富貴のみにあるのではなく、自然な自我の成長にあると云う思想が隠然と現れている。

明治37年12月19日に書いた「偶感録」

には、更に「夫れ富は吾人の肉欲の鼓吹者にして貴き人を獸的になすものなり、換言すれば自由の敵にして靈性を毀つものなり」と論じている<sup>7</sup>。まるでトルストイ直伝の発想である。

以上の論述から、武者小路はすでに伝統的な立身出世と栄華富貴に懐疑を生じ、物欲と肉欲を追求することに反対を唱えるトルストイ晩年の思想を受容していた。「良心と靈性の成長に役立つ精神的平和と快樂を追求することこそ人生の真義である」というトルストイの主張に共鳴したのである。武者小路が以前持っていた愛国的な英雄崇拜もこれにより否定されるようになった。武者小路は華族であることによる自分の寄生的生活と未熟な野心と空想から覚醒し、渴いていた人が甘露を賜わったようにトルストイに夢中になった。

武者小路は明治39年3月24日から5月10日にかけて、トルストイの伝記を写したことがある<sup>8</sup>。明治39年6月8、9日には、トルストイの『クロイチエル・ソナタ』を読んですっかり心を打たれた気持ちを次のように書いている。

「読むに従って描写は益々深刻になってくる。字字句句も誠より出ず、吾人は心地の悪いような、痛快なような、一種特別な感に打たる。十三章は、ある事が起る度に読みなほす価値あり、否寧ろ読みなほすことを要す。」(6月8日)

「『トルストイのクロイチエル・ソナタ』によりて我れは救はわれたりと思はず口の内に叫ぶ。誠にこの頃危険なりしが、この小説により醒めたる心地せり、

<sup>5</sup> 「或る男」『全集』 第五巻 p.130

<sup>6</sup> 大津山国夫 『武者小路實篤論—新しき村まで—』 p.62 を参照

<sup>7</sup> 「所感録」<2>『全集』 第一巻 p.669,671

<sup>8</sup> 「1906年(3月20日～6月16日)の日記」「彼の青年時代」『全集』 p.197,210 を参照

トルストイは誠に我が恩師なり。」<sup>9</sup> (6月9)

彼はトルストイの教えによって、人間の生き甲斐が分かるようになった。この頃の日記によると、この時期の彼の言行は殆どトルストイ主義にぴったり符合するように表現されていることが分る。彼は自分の過去の生活は不正かつ贅沢で、寄生的な生活を止めなければならないと自覚し、早く独立したいと思っていたようである。できるだけ質朴な生活を送り、トルストイの人道主義、非戦論、人類同胞主義の人間愛を自身の指針と見なしていたのである。

「白樺を出すまで」の中には、彼は「トルストイ主義にかぶれた思想で世間と戦いたい」<sup>10</sup>とっていたという記述もある。彼の偉い政治家や大宰相になる夢は消え、人道上の偉人にならなければならないと決心していたのである。トルストイアンとしてこの世の為に一生を奉仕しようとする気持ちである。

忠君愛国については、完全に脱却したとは言えなかったが、質的にはすでに大きく変わっており、以前とは全然違った思想の持ち主になったと言えるであろう。明治37年から40年までは、トルストイの熱狂的、無批判的な受容期であり、特に、トルストイの人間愛を強調する人道主義や自己完成や教育で社会を改造する理念は、その後武者小路が「自己の為」ということを強調するようになって、終生を続けることになる中心思想になったのである。

### 三、トルストイ主義の作品

大津山国夫は明治37年から40年までの武者小路の思想を「トルストイ時代」として、武者小路のこの時期の作品を十のグループに分けている<sup>11</sup>。筆者は『彼の青年時代』前半(1906年3月20日～6月16日)の日記と『荒野』に収録された作品はトルストイの影響が色濃く現れているのであり、いくつかの論文の中にトルストイの名前が散見されるので、この二つの資料が彼のトルストイ主義の思想を語ろうとする時には最も重要な資料であると思う。

大津山国夫が言ったように、明治、大正期の武者小路の思想はトルストイを主軸として回転しているのである<sup>12</sup>が一見トルストイから離れて「自己の為」を強調するようになって、更に、又、理想主義的な人道主義へと戻っていても、トルストイの人間愛や人類のために努力しようとする人生観は常に武者小路の血や肉に浸み込んでいたと思う。

明治38年に、学習院の『輔仁会雑誌』に発表した「現代の文明に就きて」(6月)、「如何にして世は改良せらるるか」(12月)は、トルストイアンとしての初期論文代表作であった。これらの文の中で、彼はトルストイ主義の精神に基づいて、富貴と権勢を否定し、人生の快樂は五欲の満足にあらず、人間は神の愛児として、真善のために働き、相愛し、助け合い、心靈の真の快樂と真理を追求しなければならないと主張した。この外に、文明を呪い、政治の虚偽と軍事武装の悪などを

<sup>9</sup> 同上 p. 217

<sup>10</sup> 「十四日会」「白樺を出すまで」『全集』第十五巻 p. 606

<sup>11</sup> 大津山国夫『武者小路実篤論—新しき村まで—』p. 74～77を参照

<sup>12</sup> 同上(同書) p. 73

も指摘したりしているが、これらにもトルストイ主義の主張がはっきり見られる。

明治40年(白樺を出す三年前)に、武者小路は正親町公和と志賀直哉と木下利玄の四人で雑誌を出そうとして「十四日会」と言う名を付け、毎月創作を作って読み合わせるようになった。この四人は皆トルストイに好意を持つトルストイの愛読者であった。『或る男』108節には、雑誌を発刊する理由が「不幸の人を救ひさへすればいいと信じ、またさうすべきであると思っている。(中略)僕の目的は現世的であると共に永久的である。(中略)永久に生命のあるものは現在にも最も必要なものである。<sup>13</sup>」と書かれている。だが、雑誌は「皆自信が持てなかった」という原因で、出さずに終わった。武者小路は一人で単行本の『荒野』を警醒社から自費出版した。収録品の多くは明治40年に書いたものである。

『荒野』は明治39年11月から41年1月までに書いたものを集めたもので、五つの短篇小説、七つの論文、七つの新体詩が収められている。これは彼がトルストイアンであった時代に、彼の思想を述べる最も大切な作品であった。その中の「彼」、「人間の価値」、「二日」、「正義の力」、「光の子と闇の子」、「背かせんが為なり」、「人生に就いて」、「平和の人」(詩)などにはトルストイ主義の影が濃く見られる。七つの論文の内容は、多くはトルストイ主義の理念と主張に沿っているものである。例えば、「彼」では、主人公は金で若い芸妓を買って、それに罪悪感を感じ、激しく懺悔して、罪を贖うために、

家族や周囲の反対を押し切って彼女と結婚し、田舎に引越し、百姓の生活をするようになる<sup>14</sup>。ここにはトルストイの『復活』の影が濃く見られる。本多秋五は、この「彼」(明治40年6月執筆)はこの時期の代表的な作品と指摘している<sup>15</sup>。

また、「光の子と闇の子」と「人生に就いて」と「短文」の中で、武者小路は次のように書いている。

「光の子は人格を重んじる、闇の子は人爵と金を重んじる。」「光の子にとっては魔酔されぬ聖霊に従って生きるのが大事で、他は大したことではない。食ふ読むは手段に過ぎない。」「光の子の真の楽しみは食事ではない。---人を愛し人に愛され、互いに信じ、互いに助ける生活と人を救う生活である。心の安慰と平和である。人と共に喜ぶことである。清き労働をすることである」<sup>16</sup>

「要するに愛なるものは自己と他人の間の垣をとるものである。他人の幸福を自己の幸福の如くに喜ぶことである。自己が他人と合一することである。愛の極は献身である。検診ということは事故を捨てるという意味ではない、自己を他人のうちに生かすことである。自己の存在の意義をすべて他人に捧げることである。」<sup>17</sup>

「自己が肉なる時、すべて見るもの聞くもの肉欲を刺激す。自己が霊なる時、すべて見るもの聞くもの美しく麗しく清し」<sup>18</sup>。

<sup>13</sup> 「或る男」 『全集』 第五巻 p.164

<sup>14</sup> 「彼」 『全集』 第一巻 p.3~17 を参照

<sup>15</sup> 本多秋五 「『白樺』以前の武者小路実篤」 『「白樺派」の作家と作品』 1968年9月 p.129

<sup>16</sup> 「光の子と闇の子」 『全集』 第一巻 p.55

<sup>17</sup> 「人生に就いて」 『全集』 第一巻 p.62

<sup>18</sup> 「短文」 『全集』 第一巻 p.69



以上の論述はまるでトルストイの伝記や小説を読んだ後の感想文であるかのようだと言えるであろう。

「二日」では、主人公小谷の田園生活はトルストイの生活方式であり、武者小路が憧れているライフスタイルでもある。小谷のピューリタンの信条と生活はまるでトルストイ主義者のそれで、当時の武者小路の思想的分身だと言っても過言ではなからう。

大津山国夫は「二日」(明治40年7月執筆)は当時の彼の精神的位相を全面的に反映していたので、トルストイ主義者としての代表作と見なしてもいいと指摘している<sup>19</sup>。筆者も同感である。確かに、『荒野』全体が基本的にトルストイ主義という基調を保っている。『荒野』の末期作品ではトルストイ主義の濃度が薄くなったと言っても、彼の指針はまだトルストイ主義の方に大きく傾いていたように思われる。

だが、武者小路の明治39年3月20日から6月6日までの日記『彼の青年時代』の前半の内容は、大部分がトルストイの伝記を写したり、著作『なくて叶わぬもの一つ』、『クロイツェル・ソナタ』を読んだりした時の感想を書いたものである。トルストイとその主義に夢中になるに従って、トルストイの人間愛を鼓吹する人道主義と「暴力を以て、真理を行わんとすることの不可能」を説く非暴力主義に心から共鳴した。4月7日の日記には次のように記されている「夢の中で大勢の人に追いかけられ、殺されそうになるうちにもく暴力に敵するには、暴力を以

ってする勿れ」ということは夢の内でも忘れていない。<sup>20</sup>」ここには彼が心底からトルストイの感銘し、非暴力平和反戦の理念を是認し、実行しようとしていることが窺われる。

日露戦争の時、彼はすでに戦争に反対するようになっていた。トルストイの日露戦争についての論文やヅウホボアの話<sup>21</sup>などは彼に強い刺激を与えた。主戦論者に対して「軍人は人間の価値を落とすて歩くものだ」と思って、「主戦論者よ。汝等こそ真先に戦争へゆけ。そして飢えよ、渇えよ、疲れ切れよ。目が覚めたら許してあげる」<sup>22</sup>と、呪いの言葉さえ吐いた。更に、乃木將軍を前にして行った輔仁会の客員演説で「軍人は人間の価値を知りません」と批判したこともある<sup>23</sup>。

第一次大戦の時には、武者小路の反戦的な態度は、さらに鮮明になり、ロシア革命の際の日本のシベリア出兵に対しても批判した。

この時期、武者小路の作品の中で、人類の立場に立ち、著しく反戦的な思想を表している作品には次のようなものがある。ここには彼の戦争に対する不安と恐れと反感がよく表現されている。

「彼が三十の時」(『白樺』大正3年10月号、11月号)には、主人公は次のよう

<sup>20</sup> 「彼の青年時代」『全集』第一巻 p. 203 及び 本多秋五 「武者小路実篤の「自己」形成期」 p. 715 を参照

<sup>21</sup> 「或る男」『全集』第五巻 p. 137

<sup>22</sup> 同上

<sup>23</sup> 本多秋五 「武者小路実篤の「自己」形成期」 p. 725 を参照

長与善郎は『わが心の遍歴』の中で、武者小路が輔仁会大会の講壇に立って、乃木大将を睨み付けようにして、「軍人は人間の価値を知りません」と二度繰り返していったと書いている

<sup>19</sup> 大津山国夫 『武者小路実篤論—新しき村まで—』 p. 85

に、個人の生命の安価や戦争の残酷や人民が戦争に無頓着になった止む無さを訴えた。

彼は戦場で何千何万の人が死んだと聞いても、もう驚かなくなった。しかし戦争がおさまって人の心が幾分か静まっている時に、抵抗力のない人間の上に加えられる残酷なことは耐えられなかった。その残酷なことをわが身の上を受けなければならない人の心は彼には恐ろしかった。(『全集』第二巻 p. 383)

独逸の兵が東京にせめ込んだ夢を見た。彼は逃げてゆく処に独逸兵の来るのを見た。彼は恐怖の絶頂に達して目がさめ切らない内に、戦争は悲惨だと思った。殺されるものの恐怖を味わった。しかし覚め切ると彼はそれを忘れた。(『全集』第二巻 p. 417, 418)

「その妹」(『白樺』大正4年3月号)では、主人公は戦争によって盲目になり、悲惨な運命に陥って、ある時は自殺を考え、ある時は発狂の恐怖に襲われるが、妹の愛情と献身によって、小説家としての再出発を決意する。この戯曲の主軸は戦争のことではないが、読者に戦争の残酷や不人道な殺戮行為を訴えて、自然に肌寒さを感じさせる。

「未能力者の仲間」(『太陽』大正4年4月号)では、トルストイの本を読んで自覚をした主人公の先生が周囲にいる人達に、トルストイの理念と自分の考えを伝え、戦争について、「戦争には大概の場合反対で、今度の戦争は大反対です。」「今度の戦争は私には無意味としか思えませ

ん。」「常に人類の立場に立って、ものを考えなさい。人間の憐れさを知らなければいけません」と言っている。(『全集』第二巻 p. 181)

「悪夢」(『中央公論』大正4年9月号)では、主人公の若者の父親は人類愛と生き甲斐を宣揚し、国家主義は人類の意志に違反していること、国家の暴力が届かない国を建てるという思想を唱えている。この戯曲に現れる主な思想や主張はトルストイ主義の非暴力主義、反戦思想、人の生き甲斐についての考えである。(「悪夢」『全集』第二巻 p. 264)

「或る青年の夢」(『白樺』大正5年3月号～11月号)は、武者小路のよく知られている反戦的な戯曲の代表作で、反軍国主義、反戦思想に貫かれている。劇中の一人の亡霊は日本の戦争発動を非難し「南亜の戦争は英国の恥です。青島の戦争はJ国の恥です。印度人に対する国のやり方は反対すべきです。朝鮮に対するF国のやり方も僭越です。」「他国民を亡国の民にするということは恥すべきことです。我々がそのために戦うことは人類の意志に背く、恥すべきことです。」と批判している。(「或る青年の夢」『全集』第二巻 p. 513)

第一幕の終わり近くで、主人公の青年は「国家主義から戦争は必然の結果として生ずるのです。自国の利益のみを図り、又自国の利益のみ図ることがいいことになっている今の時代では戦争がなくならないのは当然過ぎます。」とも言っている。(「或る青年の夢」第一幕『全集』第二巻 p. 523)

昭和2年(1927年)に日本は山東に第一次出兵をし、翌年済南事件によって第二、三次出兵したが、武者小路は昭和3年6月号の『大調和』の中の「三段雑記」に、日本が支那に出兵したのに対しては、直

接に批判しなかったにもかかわらず、殺したりや殺されたりする支那人と日本人に同情したりして「マッチ一本でも大火事は起り得る。一人の愚人から大戦争は起りうる。お互いに謹みたいものだ」<sup>24</sup>と比喻を使って書いている。さらに、七月号の巻頭言（「新国家主義」）には、彼は自国の利益のために他の国を侵略するのは他国の意志と人類の意志に違反しているとして、それを次のようにはっきりと反対する言論を述べた。

日本は支那に出兵するためには二千万を投じることなどはなんとも思わない。しかし日本人の生活のためとあればもっと喜んで大金を出すようにありたいものだ。自分は外国を自国の利益のために利用することを恥じる。外国に対してはよき隣人でありたい。外国の国家のために働けたら働きたい。新国家主義は他国の新国家主義と衝突しない。他国の利益を侵略しない。共存、共栄を言葉通りの意味で実行出来たらするが、それも他国の意志を尊敬しての話である。--- 真の新国家主義は同時に人類主義であり、又個人主義者でもありうるものと自分は信じているものだ。<sup>25</sup>

また、昭和6年に満州事変が起こった時、武者小路は「A先生の遺稿」（昭和7年8月に、『中央公論』発表）に、日本が「国家的エゴイズムを捨てて、天道に順ふべき」ことと、「反省すべき時が近づいている」ことを説き、かさねて日米開戦をおおることの危険を警告した。

昭和12年（1937年）の日中戦争勃発の

直前に、彼が発表した「欧州旅行雑感」では、次のように平和への願いを吐露した。

「西洋へ行って何を感じて帰ってきたかと言うと、画のことは別とすれば、世界の平和と言うことだ。世界の平和はいつ来るか分からないだけに、なんとかとして世界が平和になってくれたらと思う。世界の平和は、すべての人が平和に生活できることが第一条件だ」<sup>26</sup>

以上いくつかの引用で述べたものにおいて見られるように、昭和10年代までも、トルストイの非暴力と平和主義の理念を守り抜いていた。彼は戦争が起ることを恐れると同時に、日本の安危を危惧して、「日本だって今度こそ、手負いをしないわけにはゆくまい。しかし恐らく戦争は起るまい。又起らないことを望んでいる。自分では戦争を未然に止める力はない」<sup>27</sup>と嘆いていた。

だが、よく知られているように、太平洋戦争期においても、武者小路の天皇に対する愛と尊敬は一度も変わったことがなかった。戦争中、武者小路は転向し、戦争に賛成し、協力したのである。これは小さい時から彼の心に滲みこんだ愛国思想と強い国家意識にかかわる問題だが、本稿ではこの部分の論述を省略したい。彼の太平洋戦争期の言論を除くなら、非暴力の平和主義は彼の一生を貫く中心理念の一つになっていたと言えるであろう。

<sup>24</sup> 「大調和」前後（二）『全集』第九巻 p. 549

<sup>25</sup> 「大調和」前後（二）『全集』第九巻 p. 552

<sup>26</sup> 「欧州旅行雑感」『全集』第十二巻の解題 p. 691  
昭和12年3月13～15日に東京朝日新聞に連載されたが、この一節は日中戦争によって、『湖畔の画商』を編集するとき、削除された。

<sup>27</sup> 「渡欧前雑感」『全集』第十二巻の解題 p. 696

#### 四、トルストイ主義からの脱出と超越

トルストイの著作を読み始めた時、武者小路はトルストイの思想と理念に感動し、共鳴して、熱狂的、無批判的に受容したといっても過言ではない。だが、このような熱狂的、無批判的な受容期は長くは続かなかった。トルストイ主義に心酔している時は、彼は肉欲を軽蔑し、罪悪と見なしてすべての苦痛と欲に打ち勝とうとばかり思っていた。彼は偉人の伝記を読むことによって、自分の圧力と肉欲に打ち勝つように鞭撻しようとしたのである。だが、現実的には彼が感じた圧力と肉欲の力は想像以上に強く、彼の意志を以っても、コントロール出来なかったのも事実であり、彼を理性と肉欲の矛盾相克の苦闘に陥らせた。『彼の青年時代』前半の日記（1906年3月20日～6月16日）では、彼が霊と肉、奉獻と享樂という二元対立の矛盾と苦悶に陥っている記事が幾回かあった。『彼の青年時代』前半期、即ち明治36年3、4月頃かそれ以前に、彼の心には、既に霊と肉の矛盾とともに、自我重視の考え方と自己犠牲への懷疑というものがすでに徐々に生じていた可能性があるということだ。これは、いずれも武者小路の生まれ付きの思考好きと自我主張の強い性格がかかわっていると思う。武者小路はトルストイに息苦しい目にあった時、メーテルリンクによって、その息苦しいところを解除された。

『或る男』の記載によると、武者小路は明治38年に上田敏から、始めてメーテルリンクのことを聞き、明治40年に『智慧と運命』のドイツ語の訳本を入手した。上田敏からメーテルリンクのことを聞いてから、メーテルリンクの独訳の

本を買って、わからずなりに読むようになった<sup>28</sup>。『智慧と運命』が入手された時は明治40年7月頃だであるが、『智慧と運命』を入手する前に、メーテルリンクのことについて、ある程度読んでいたことが分かる。メーテルリンクの思想の断片はすでに武者小路の頭に入り込んでいたと言えるであろう。

明治39年12月28日に執筆した「修養の根本要件」の内容も見逃すことはできない。冒頭には、「我れ自身に於て嘆美すべきものを見出さずば他人を嘆美すること能はず<sup>29</sup>」というメーテルリンクの名句を引用した言葉がある。この文句についての論説がなかったが、その内容は自己を知ることや自己の力量を知ることや自己に適す職業などを説くのである。その中の「己を知れ」、「自己」、「職業」、「十字架を任て天職に従へ」という文の中には、次のようなメーテルリンクみtainな考えが現れている。その大要は

- ・「自己の力量を知らざる人は自己を知らざるものなり」（「己を知れ」『全集』p.682）
- ・「理想は大にせよ、空想を抱く勿れとはよく人の云ふ所なり、而して両者の別るる所一つに己を知ると知らざるにあるは明なり」（同上）
- ・「自己は統一されたるものにあらず、矛盾あり撞着あり衝突あり、実に自己の最大の敵は自己なり、自己の最

<sup>28</sup> 「トルストイとメーテルリンク」『自分の歩いた道』『全集』p.540 を参照

<sup>29</sup> 「修養の根本要件」『全集』第一巻 p.681 「修養の根本要件」は明治39年の年末に執筆し、『輔仁会雑誌』第七一号に発表された。明治39年は武者小路が東京帝大文科大学社会科に入ったときであった。

- 大の味方は自己なり、自己を欺くものは自己なり」(「自己」p. 683)
- ・「自己を幾分か解せりとせよ、しからばこれを發揮するを要す、ここにおいて自己力量に適せる最良の職業をとれよ」、「自己の性質上忠実なりえる職業こそその人の天職なり」(「職業」p. 685)
  - ・「真の自己の許可する仕事をなす時はその仕事の何たるやに關せず、常にこの大なる目的に向いつつあること之なり」(同上)
  - ・「他のことは他人に任せ、ただ自己の天賦の才能を發揮するに力を尽くすこと必要なるは当然のことなり」(「十字架を任て天職に従へ」p. 686)

以上の論説から見ると、メーテルリンクの影と共に「自己を生かす」、「自己に忠実すること」の主張が明白に見られ、個性主義に立脚した職業観が示されている。すなわち個性主義は天職を知ることによって完成し、それによって自己の価値が最大限に發揮し得るという武者小路式の個人主義の基盤が示されているのであろう。

もう一つ注目したいのは「修養の根本要件」の中の「己を知れ」という短文には、引用されたソクラテスの「自己を知るとは人間に利益を与へ、それに反して自己を欺くことは最大の損失を与ふることは今や明らかなり、自己に適不適のものを知る、己に適せることを為すは以て衣食を得、且つ幸福に生活するを得べく、己に適せざることを避くる時は過誤失敗を免れ、自ら不幸に落入ることとな

かるべし、自己を知る時はよく他人を知り他人によりて己の利益を得可く損失を遠け得べ、・・・<sup>30</sup>」という論説は、メーテルリンクの「人間の幸・不幸は、外的条件によるよりよりもむしろ内的条件、即ち心の持ち方に左右される。」及び「洞察力に富む智慧さえあれば、人間は不幸の運命を転じて幸福を勝ち取ることが出来る。」<sup>31</sup>という言葉とは共通する処があるのではないだろうか。それで、「修養の根本要件」を書いたとき、武者小路の「個人主義」の意識がすでに台頭していつて、既にトルストイズムからある程度離脱しつつあるように感じられる。ドイツ語の訳本『智慧と運命』を入手したのは明治40年である。だが、以上引用した文句には、メーテルリンクの影だけではなく、『智慧と運命』の考えも見られる。それで、『智慧と運命』を入手する前に、武者小路はメーテルリンクの論文や脚本は勿論、『智慧と運命』の内容について、読んだか聞いたことがあるはずだと思う。

「修養の根本要件」について、米山禎一は「これらは武者小路が自己調節能力を身につけながら、トルストイからしだいに脱却してゆく最初の過程であり「自己の為」にまっすぐ繋がっていく考え方である。<sup>32</sup>」。「この論文は武者小路の個人主義の確立にとって、一つの画期的な作品である<sup>33</sup>」と認めている。筆者も同感し

<sup>30</sup> 「己を知れ」「修養の根本要件」『全集』第一巻 p. 682

<sup>31</sup> 菊田茂男「上田敏とメーテルリンクの出会い」『欧米作家と日本近代文学』p. 276 1975年

<sup>32</sup> 米山禎一『武者小路実篤—日本の超越主義者—』p. 110, 111を参照 大新書局 1986年

<sup>33</sup> 米山禎一『武者小路実篤—日本の超越主義者—』p. 116を参照

たい。

だが、本多秋五は、「修養の根本要件」はまだトルストイ主義の影響圏内のもので、メーテルリンクの影響は表面化していない。トルストイ主義の影響が表面化するのにある時間を要したように、メーテルリンクの影響が浸潤するのにも時間を要したのである。<sup>34</sup>と指摘した。本多秋五の指摘は無理ではなかったが、それにもかかわらず、「修養の根本要件」には武者小路の「自己」概念が出て、彼の「個人主義」の基盤も出来たことは明らかであると思う。

また、『荒野』の中の「人間の価値」と言う文の中には、トルストイ主義の考えのほか「真の快樂を求めればそれが同時に善であり、真の善即ち真心から発した善は同時に真の快樂である」、「世に最も幸福な人は（中略）善人です」<sup>35</sup>という善と快樂との一致説があり、『智慧と運命』の中の「内部の幸福とは善行の後に楽しく感じるようなことである」ということと、意味においては、同じではないかと思われる。また、「真の利己を謀ればそれが人類の為になるように人間が作られている処に人間の価値があるのです」という考えには、武者小路の個人の利益は人類の利益と衝突しないという利己利人の調和の主張が初めて見られると言えよう。また、『荒野』中の「光の子と闇の子」には、「清き恋知るものはただ一人の女を尊敬す。その女を通して光の歌を唱ふ。これがダンテの恋。かくてメーテルリンクの『知と運命』<sup>36</sup>は頭れたり。」<sup>37</sup>と

言う論説の中に、メーテルリンクの『知と運命』が文中に現れているが、はっきりした考えは伝えていない。その恋はメーテルリンクの靈の恋みたいなものだと考えだけであった。

この時、武者小路の書いた『智慧と運命』の作者の名前と書名の書き方は「メーテルリンク」と『知と運命』であったが、その後、彼の書き方は「マーテルリンク」と『智慧と運命』にかわった。このことについて、武者小路は「自分の歩いた道」に解説があった。メーテルリンクと『智慧と運命』を知ったばかりだし、メーテルリンクもまだ余人に知られていないし、一致した読み方がなかったということである<sup>38</sup>。メーテルリンクについての認識はまだ深くはなかったが、メーテルリンクに対して、すでに大まかな認識があった。それに、メーテルリンクの考えに共鳴したことが推測できるであろう。

「二日」には、主人公小谷が彼の友達への絶交状の中で「僕は相変わらず個人主義である。しかし君も承知の如く個人主義と云ふのは自己を以て他人より勝れりとする主義ではない、自己の善と信ずる事を何処までも行ふ事に依ってのみ理想国が出来ると云ふ主義だ」<sup>39</sup>と書いている。この主人公の思想はトルストイ主義の精神に背かないといっても、武者小路式の個人主義へと歩み行く痕跡が見られると思う。

だが、トルストイの主張に息苦しい感

<sup>34</sup> 本多秋五 「武者小路實篤の「自己」形成期」『全集』第一巻 p. 724

<sup>35</sup> 「人間の価値」『全集』第一巻 p. 43

<sup>36</sup> 「光の子と闇の子」の中に、『智慧と運命』は

『知と運命』と書かれている。

<sup>37</sup> 「光の子と闇の子」『荒野』『全集』第一巻 p. 55

<sup>38</sup> 「自分の歩いた道」『全集』第十五巻 p. 540

<sup>39</sup> 「二日」『荒野』『全集』第一巻 p. 23

じがしたことには、も一つ注目したいのは武者小路のトルストイの無抵抗主義と無政府主義に対する見方である。疑いなく、武者小路がトルストイの非暴力と平和反戦的主張に共鳴し、是認した。それにもかかわらず、トルストイの無抵抗主義と無政府主義については「無抵抗主義の実行が心から出来る時はいつだろう」<sup>40</sup>と嘆いた。反対はしなくても、トルストイの無抵抗主義を実行する可能性が殆どないと思ったのである。ほかに、国家の存亡に関わるほどの戦争には、武者小路は明確に反対したこともない。その原因は主に武者小路の心に埋もれた忠君愛國思想と日本優先の国家意識にかかわるかもしれない。太平洋戦争期に、武者小路が戦争賛成の立場に転向し、戦争に協力したこともこの意識に深く関わっていると思う。

また、負け嫌いで強情な気質の武者小路は、『或る男』93節の中に、「彼は母を愛した、無抵抗の愛には叶わなかった」と「自分は生まれつき自我に執着する男である、されば自分は自我を何物の犠牲にしようとは思わない」<sup>41</sup>という言葉がある。さらに、1924年8月18日の日記に「自分は暴力を否定する。暴力に対するには無抵抗を持ってすべしとまでは自分はまだ言えない」<sup>42</sup>と述べている。以上の言葉から、武者小路の生まれつき自己に執着し、自己を生かす傾向がよく分る。故に、武者小路はトルストイの主張する無抵抗主義には疑問があつて、心から同感できなかったのも理解できるであろう。

もう一つ注目し値することは、晩年のトルストイによる芸術否定の思想も武者小路を迷わせていたことであろうと思う。トルストイの思想に接して間もない時、武者小路はトルストイの芸術否定の思想に対しては、関心を抱かず、違和感を感じなかったかもしれない。だが、当時の失恋の苦痛を慰めるために、彼は芸術を求めたのである。

明治36年に、志賀直哉や正親町や有島生島らと交際することによって、西洋の画や雑誌に接触し、画の鑑賞のしかたを学び、だんだん画が好きになった。同年、正親町にある白馬会に案内されて、初めて展覧会を見た。彼は「何ということなしに芸術を愛した」<sup>43</sup>、「画を見るのは本を読むより楽でもあり、自由でもあった」<sup>44</sup>とも書いている。その後、洋書、洋雑誌から西欧の美術状況を次々と吸収していった、文学や画のことは殆ど彼と友人の主な話題になった。芸術は彼の頭と心を自由にさせた。トルストイの禁欲主義から受けていた重苦しい気持ちと束縛も多少解かれたのである。だから、ロマンロランと同じくトルストイの芸術の否定<sup>45</sup>に違和感を感じるようになったのは極めて自然であろうと思う。

『彼の青年時代』後半の日記(1908年4

<sup>43</sup> 「或る男」 『全集』 第五卷 87 節 P. 135

<sup>44</sup> 「或る男」 『全集』 第五卷 104 節 P. 159

<sup>45</sup> ロマンロランの書いた『トルストイ伝』の中に、「芸術批判」という章節がある。その中で、トルストイは芸術は宗教的理想性を持たなければならない主張をし、シェークスピアやベートーベンやモネなどの偉人にも批判したことを論説したことがある。トルストイの主張に対して、ロマンロランは反対し、トルストイの芸術否定を批判したことがある。

ロマンロラン 著 傅烈 訳『托爾斯泰傳』の p. 89~101 を参照

<sup>40</sup> 「彼の青年時代」 『全集』 第一卷 p.204

<sup>41</sup> 「或る男」 『全集』 第五卷 93 節 P. 141

<sup>42</sup> 「気まぐれ日記」 『全集』 第五卷 p. 546

月16日～12月6日)には、西洋画や美術についての記事や感想文がたくさん見られる。彼の視野は広くなり、肉欲の世界に対しても、新たな認識を深めていった<sup>46</sup>。ロダンの「接吻」という有名な彫刻作品は「自然尊重」を示すものだと理解され、エロチックな刺激にも彼は罪悪感を感じさせなくなったのである。

さらに、明治40年には、彼が「肉を肯定しながらしかも霊の世界の住民となれた人<sup>47</sup>」と言っているドイツの画家クリンゲルを尊敬するようになった。クリンゲルの画の内に、肉体を罪悪として扱わずに自然として扱い、抱擁を賤しいものとせず、勇ましいものとして扱っているのに同感した。それは罪を超越して自然であると認めた<sup>48</sup>。霊と慾の間のバランスが崩れて精神の危機に落ちていた武者小路は、ロダンやクリンゲルの作品によって、やっと活路を見出して、自然から与えられたものを全面的に肯定するようになったのである。だから、トルストイの芸術否定の思想も、彼がトルストイ主義から脱却しようとするようになる原因になったと思うのである。

圧力と重荷を背負い、現実の苦しみをなめて、息苦しく感じていた武者小路は熱狂的な激情期を経てから、冷静に再考し、自分のほしいもので附合したものを吸収し、自分のものにして、符合しないものを捨てるに至ったのは必然的である。これも人生修行の一階段であろう。だから、武者小路は反省、思考して、窒息するような苦しみを脱し、新たに自分の力に合う道を捜しだそうとしたのも極め

て自然のことであろう。

明治43年、『白樺』創刊を境として、武者小路の「個人主義」の理念がますます明確になった。明治末年から「新しき村」創立にかけて、武者小路は個人主義や利己主義として文壇で活躍していた。武者小路の「自己の為」の個人主義は他人の幸福を省みない利己主義ではなくて、自分の自我を尊重すると同時に、他人の自我を尊重し、他人から不快な思いを受けたくないように他人を自分のために不快にさせることを忌避しようとする。自己に忠実になって、個人に与えられた資質や能力をできるだけ立派に生かすことが人類の意志に符合し、自然の意志にも符合すると考えた<sup>49</sup>。人道主義と衝突しない、「自己を生かす」、「個性の尊重と発揮」の理念とする個人主義なのである。

彼は「人類愛について」という文には、「人類の生命を尊敬すると同時に個人の生命を尊敬し、全体も部分も生きることである。」と述べている。自然の意志、人類の意志を尊重して、人類の生長のために、個人がいかに生きるべきかを探求した。このような考え方はトルストイの人道主義そのものではないが、トルストイの人類主義と人類愛の理想には極めて近いと言えるのではないだろうか。

## 五、「新しき村」におけるトルストイ主義

トルストイズムからの離脱ということに関連して、もう一つ注目しなければならないことは武者小路の「新しき村」の理念である。武者小路の一生で最も注目される事業は「新しき村」の創立である

<sup>46</sup> 「或る男」 『全集』 第五巻 104節 P. 159

<sup>47</sup> 「或る男」 『全集』 第五巻 112節 P. 169

<sup>48</sup> 同上

<sup>49</sup> 『『白樺』の運動』 『全集』 第十五巻 p. 615. 617 を参照



う。『或る男』100節の中では、明治39年の秋、「変な夢」を見たことを書いている。武者小路はこの夢の内容を詳しく記述しているだけでなく、その日付も「1906年11月20日」とはっきり記載している。その重要な部分の内容を見れば、トルストイの影響を受けた。トルストイの「理想国」みたいのものについての夢想であったことが分る。これは「新しき村」の仕事をはじめた時より十二、三年前に書いたものである。夢の内容から見ると、当時の武者小路がトルストイ思想に従って、「神の王国は汝らの内にあり」と考え、心の中に理想国を建設しようと思っていたことが考えられる。

何故新しき村の生活を始めたかについて、武者小路は彼の「生涯を顧みて人生を語る」の中で、「それはトルストイによって播かれた種が枯れ切っていなかったのが一番主な理由かと思う<sup>50</sup>」と回想している。彼のトルストイ思想受容がいかに深かったかが分る。武者小路は後に、トルストイから独立したといっても、この夢はやはり彼の頭に残っていた。『或る男』100節の中には、文学に従事しようと思ったのもこの時であったという次のような記述がある「彼にとっては文学をやろうと思ったのと、新しき世界を生み出したいと思ったのとはほとんど同時である。それは彼の双生児である。<sup>51</sup>」。

武者小路はこの世の不平等や不合理を打破するために、一生貢献しようという覚悟ができていた。彼は社会改造を根本から行わなければならないと考えたが、暴力や政治の手段をもって進めようとし

たのではない。自分と読者に心靈の革命を起こそうと決心していたのである。そのために、武者小路は文学をやろうと決心した。だが、この社会を改造し、神の国のような理想国を建設することは、二十歳の彼にとっては負担が重過ぎて、自分の力に合わない重荷となった。トルストイ主義の「理想国」は彼にとっては実現不可能に思われていたが、完全に捨て去ることはせず、一つの夢として心の奥にしまい込んだのだった。

武者小路はメーテルリンクなどの思想家や偉人の啓示によって、自己の力を顧慮する必要があった。そのために、彼は「できるだけ主義」ということを考え付いたのである。米山禎一によると、武者小路の「出来るだけ主義」は、それまでの日本の知識人にはない、武士道や無常観に囚われずに、徹底的にどこまでも生き抜くと言うことを前提として形成されたものである。弱点、矛盾があることは人間の常と考え、あくまでも自己の個性を生かすことで社会や時代に貢献しようとするものであった<sup>52</sup>。

武者小路は大正7年に有志の人々とともに「新しき村」を創建し、彼の夢を実現した。武者小路は当時の社会主義を空想的社会主義とみなして、興味を持っていなかった。彼の夢は「自己を生かす」こと、「個性を生かす」こと、「生命尊重」などの理念が生かせる自他共生の共産的社会であった。それで、武者小路の理想的「新しき村」は「各自の自我を生かすこととお互い協力することと、この二つがうまく調和される<sup>53</sup>」「人は義務労働を

<sup>50</sup> 「生涯を顧みて人生を語る」『私の人生観—人生論集2』 p.217

<sup>51</sup> 「或る男」『全集』第五卷100節 P.155

<sup>52</sup> 米山禎一 『『白樺』精神の系譜』 武蔵野書房 p.263 1996年

<sup>53</sup> 「新しき村に就いて」『全集』第五卷

果たすことによって、生活の保証を得、そして安心して自由の時間を生かすことによって、自己の完成を心がける<sup>54</sup>」という理想的社会である。

「新しき村」建設の時期には、彼は改めて隣人愛や人類愛や自然の意志を説くようになった。この頃彼が書いたものの中には「人類」という概念が重要な位置を占めていて、それがしばしば強調され、頻繁に出てくる<sup>55</sup>。トルストイの「人類愛」の思想はやはり武者小路の心にしみ込んでいえる。彼にとっては、「新しき村」は自己を生かし、個性を発揮することもできると同時に、人類に対して応分の奉仕もすることが出来る理想社会のモデルであった。「協力」と「独立」を併せる自他共生の村であると言えるであろう。トルストイの「理想国」そのものではなかったが、トルストイの影響を受けていることは言うまでもないことである。「新しき村」の土地は個人の私有が認められなくて、村のものである。これもトルストイの影響をうけている考えのだと思う。「新しき村」の創立について、亀井勝一郎はそれを精神協同体と看做して、キリストの精神が元となって、トルストイの影響も強く受けていたものである。自然の意志の実験道場とも言える。そして、武者小路文学の生成に与えた作用は大きい。「自然の意志」「人類愛」という言葉が抽象化されず、武者小路の作品において生きえたと認めている<sup>56</sup>。

「新しき村」について、大津山国夫は「武者小路が「新しき村」で夢見たのは〈武者小路の〉トルストイ主義を理念とする社会主義社会であって、〈武者小路の〉トルストイ主義に対立する社会主義社会ではない。」<sup>57</sup>と指摘している。

要するに、「新しき村」は武者小路にとっては、トルストイ主義の理想に到達できなくても、各人が自分を最大限に生かせるような社会を理想として創立しようとした自他共生の社会だった。トルストイの理想社会をを理念とする社会主義社会へ出来るだけ近づけるための一つの道だったと言えるであろう。

## 六、終わりに、

トルストイは晩年の武者小路の思想の中心に置かれていないとしても、その形成に最も大切な役割を果たしていたということには容易にうなづくことができる。武者小路が晩年に持っていた中心思想と主張はトルストイ主義とはかなり違ったところがあるが、武者小路を研究する者は、誰でも、トルストイ主義が武者小路の人生と思想に重大な影響をもたらしたことを否定しないはずである。

武者小路はトルストイによって、本当に生き甲斐を得ようと思うならば、神の意志に従って生きる<sup>58</sup>とすることが必要であることを学んだ。だが、「神の意志」を武者小路は「人類の意志」ないし「自然の意志」に従って生きると解釈している<sup>59</sup>。さらに、トルストイによって分かっ

p. 398, 399

<sup>54</sup> 「理想的な社会」 『全集』 第四巻 p. 135

<sup>55</sup> 阿部軍治 「武者小路とトルスト」 (その四) 『言語文化論集』 p. 364

<sup>56</sup> 亀井勝一郎 「武者小路実篤論」 『現代日本文学大系』 第33巻 p. 440

<sup>57</sup> 大津山国夫 『武者小路実篤論—新しき村まで—』 p. 95 1974年

<sup>58</sup> 「自然の意思に従って生きるということは生き甲斐を得る道を自然の法則に従って得よというのだ」「自然という言葉」 p. 439

<sup>59</sup> 「自然という言葉」 『後ちに来る者に』 『全集』

た「良心と靈性の成長に役立つ精神的平和と快樂を追求することこそ人生の真義である。」と「全人類の幸福を理想にしなければならぬ<sup>60</sup>」という信念も武者小路が終身抱いていた信念となった。

トルストイは確かに武者小路の生活と人生路の選択に重要な影響を与えた。トルストイの著作を読んでから、武者小路はトルストイの思想と理念に感銘を受け、共感していたので、大学に入る時、社会科を選ぶことにした。武者小路が大学をやめる決心をしたこともトルストイの言葉から勇気を得たのであった<sup>61</sup>。晩年の彼は昭和28年10月に発表した「わが生涯を顧みて人生を語る」の中で、「自分が今まで殆ど酒を飲まなかったし、たばこも吸わなかったのはトルストイのお蔭だと思っている<sup>62</sup>」と語った。そして、「今でもトルストイを自分の第一恩師と思っていることに間違いはない。トルストイを知らなかったら、僕の生活は随分変わっていただろう。文学をやったかどうかそれも分からない。政治家になっていたかもしれない<sup>63</sup>」と回想している。また、「自分は今ではトルストイ風の人よりはホイットマン風の人を好んでいるが、トルストイに教わることは実に多いし、トルストイの真価はもっとはっきり人々が知るべきだと思い、特にトルストイのキリスト教的精神の徹底さには教わるべきことが多く、又心を清められ、決心を強められることも多い。」<sup>64</sup>、「人間の価値は

靈を生かすところにある。」<sup>65</sup>「僕はトルストイと考えは違うが、トルストイに頭を下げるのはその靈を生かすために実にトルストイは真剣であったからで、トルストイのものを読むと自分のうちの靈が呼び覚まされるからである。」<sup>65</sup>とも述べている。武者小路の心底の靈はトルストイに目覚まされて、精神的な洗礼を受けていたと言っても良いのではなかろうか。

メーテルリンクやホイットマンなどの思想は基本的に、同じく生命の意義や人間愛や人類の生長と幸福に役立つことを基調としているのであるから、トルストイファンとしての武者小路にも受け入れられるものだったと思う。だが、メーテルリンクの「明智の人は其運命を自分で左右し、積極的に自分の人生の幸福を追求して、人間の幸福に達することができる」、「自分の力に会わない善事は自分にとって重荷であり、そして成長に害のあることだ」、「自分を本当に愛することは、他人の内にある自己を愛することだ」という観念は武者小路に大きな衝撃を与えた。

また、ホイットマンの自然と人間への愛と情熱及び率直な作風・自己や性愛の肯定・自然尊重は武者小路を感心させた。

彼らの思想理念はトルストイの肉欲を否定するような禁欲主義、個性や自我を無視するような自己犠牲の精神、芸術否定の思想とはかなり違うものである。それで、メーテルリンクやエマーソンやホイットマンなどからの刺激によって、彼の自我の意識は台頭したてきたと言えよ

p. 439, 440 を参照

<sup>60</sup> 「私の人生観」『武者小路実篤人生観2』p. 9

<sup>61</sup> 『全集』第十五巻 p. 602~605 を参照

<sup>62</sup> 「わが生涯を顧みて人生を語る」『私の人生観—武者小路実篤人生論集2』p. 203

<sup>63</sup> 同上

<sup>64</sup> 「トルストイ雑感」『大調和』昭和3年9

月号『全集』第九巻 P.561

<sup>65</sup> 「トルストイ雑感」『全集』第九巻 p. 557

う。

武者小路はトルストイ主義の思想をすべて捨てたのではなく、トルストイから学んだ「人類のため」、「人間愛」、「自我完成」、「非暴力平和」などは、1937年の日中戦争から連合国への降伏までの期間を除いて、やはり彼が一生を通じて、持っていた信念と主張であることが分かる。

このことについて、阿部軍治は「トルストイ離れをしていたと見られていた時期にも、その深層においてはトルストイ主義が残っていて、健在であったし、少なくともトルストイとの共通項が多く存在したのである」<sup>66</sup>と「武者小路の晩年には又あたかも再びトルストイへの思慕、敬愛を深めたかのようであった。特に戦後書いた物の中ではよくトルストイを肯定するようになっているのである」<sup>67</sup>と指摘している。確かに、武者小路は晩年にトルストイについてのことを語った時には、ほぼ全面的に肯定、感謝を表しているのである。

武者小路は昭和11年に発表した短文「水量の多い大河」の中で、「トルストイの偉大さはその人間らしさにあると言える。(中略)彼は力のありあまる男だ、水量の多い大河のような男だ。(中略)彼は自己を本当に救ったのだ。同時に我等にも、如何にせば自己を救えるかを教えている、日本に新しい宗教的気運が起こったのも、実に彼の力だといえる。(中略)彼は聖者ではないが、生きた本当の人間だった。彼は文学の大先生であると共に、人類の真の意味の教師であり、我等が生

きる目標を示すものである<sup>68</sup>」と述べている。彼のトルストイへの崇敬の気持ちがよく分かる。

大津山国夫は「武者小路はトルストイから精神の尊厳と人間の尊厳を初めて学んだ」と言っている。明治41年以後、彼はトルストイから必死の脱却を試み、半ばそれに成功したのであるが、それでもなおトルストイは最大の恩師であった<sup>69</sup>。昭和11年4月に講談社が武者小路の評伝『トルストイ』を発行した。この評伝の重点はトルストイとはどんな思想を持ち、どんな生活をしてきたかを読者に伝えることに置いていたが、ここでは、武者小路はトルストイが若い時から絶えず「自己完成」に心を注いでいたことを幾度も述べている。「自己完成」という目標を成し遂げる上で、武者小路はトルストイと一致していると思う。トルストイの中心思想が人類本位にあるのに対して、武者小路の中心思想は個人本位にある。それにもかかわらず、生命の意義と価値の探求においては二人の考え方は大体同じだったと言える。

『トルストイ』の「自序」で、武者小路は次のように書いていた「自分が今あるのはトルストイのおかげだと思っている。自分にとってトルストイは最大の恩師であった。今自分はトルストイの思想と同じ思想を持っているとはいえないが、しかし自分が人生に深い信頼を失わずに今日まで来られたのはトルストイのおかげである」と。

確かに、武者小路はトルストイの思想

<sup>66</sup> 阿部軍治 「武者小路とトルスト」(その四) 『言語文化論集』 p. 341

<sup>67</sup> 同上 p. 332

<sup>68</sup> 「水量の多い大河」 『全集』 p. 403

<sup>69</sup> 大津山国夫 『「武者小路実篤論」-新しき村まで-』 p. 72

と同じ思想を持っているとは言えないが、彼はトルストイにより、人生の意義に就いて、いろいろ考え、そして自覚し、人類の成長と幸福のために、努力しなければならないという人生の方向を見つけ

たのである。それに、トルストイが国民教育と農奴制度の改革に心酔していたように、武者小路は心靈の教育と改革及び「新しき村」の建設と発展に全力を尽くしたのだと言えるだろう。

### 参考文献：

#### 日本語の本

1. 阿部軍治 「武者小路実篤とトルストイ」 『言語文化論集』44,45号 1997年,48,49号 1998年 筑波大学現代語文学系出版
2. 亀井勝一郎 「武者小路実篤論」 『現代日本文学大系』 第33巻 1970年
3. 大津山国夫 『「武者小路実篤論」——新しき村まで』 東京大学出版会 1974年
4. 長与善郎・編 『武者小路実篤読本』(『文芸』臨時増刊号) 河出書房 1955年
5. 福田光治、剣持武彦、児玉晃一 編 『欧米作家と日本近代文学』第三巻 ドイツ篇 教育出版センター 1976年
6. 本多秋五 『武者小路実篤入門』、『日本現代文学全集47』 講談社 1962年
7. 武者小路実篤 『武者小路実篤全集』(全18巻) 小学館 1987年
8. 武者小路実篤 『武者小路実篤の人生論集』 全六集 講談社 1972年

9. 武者小路実篤 『わが生涯を顧みて 人生を語る』 青林書院 1953年
10. 米山禎一 『武者小路実篤—日本の超越主義者—』 1986年 大新書局
11. 米山禎一 『『白樺』精神の系譜』 武蔵野書房 1996年
12. 『武者小路実篤の世界』特集 『国文学 解釈と鑑賞』813 至文堂 平成11年2月号
13. 関口弥重吉・編 『武者小路実篤 喜寿記念特集』〔この道〕6月号 原文堂 1961年

#### 中国語の本：

14. 羅曼羅蘭 著 傅烈譯 『托爾斯泰傳』 大漢書局 1982年
15. 林致平 訳 『トルストイ——生平及其代表作』 五洲出版社 1976年

## Saneatsu Mushanokoji' s Main Thinking and Tolstoy

Hsia Yen-wen

### Abstract

Saneatsu Mushanokoji is deeply affected by Tolstoy in the formation of his main thinking. Tolstoy' s impact on Mushanokoji cannot be minimized although their main thinking shows some differences.

Being inspired by Tolstoy, Mushanokoji realizes the importance of man' s worth, human love and genuine happiness gained by acting upon one' s conscience. In his lifetime, Mushanokoji upholds Tolstoy' s concept that the true meaning of life results from mental peace and happiness that are beneficial to man' s conscience and mental growth. Due to his influence by Tolstoy, Mushanokoji wishes to be a great humanist for the good of mankind' s mental growth. In fact, Mushanokoji' s brilliant and remarkable performance in the literary world is well-known as a lifetime mental reformist and educator. The above reasons make me deal with the subject of "Mushanokoji' s Main Thinking and Tolstoy" in this article.

Keyword : Tolstoy' s concept 、man' s worth 、human love 、mental growth